

## 都の南蛮寺礎石に想いを寄せて

清瀬みさを

奨励者紹介 [きよせ・みさを]

同志社大学文学部美学芸術学科教授

この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。

これを信じる者は、決して失望することはない。」

従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じていない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった」

のであり、また、

「つまずきの石、

妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、

今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」

のです。

(ペトロの手紙一 2章4—10節)

はじめに

- 一 「都の南蛮寺」遺構の発掘と遺物
- 二 狩野宗秀 扇面画帖《都の南蛮寺》
- 三 南蛮屏風に見る近世初期の風俗
- 四 日本におけるキリスト教聖堂

## 五 「都の南蛮寺」フロイスの記録から おわりに

### はじめに

二〇二三年十月、今出川校地の総合図書館が、新図書館建設のために解体されることとなり、立ち入り禁止の柵で囲われました。二〇二四年の年明け、長年見慣れた図書館の姿は防音シートで覆われました。この覆いの中、一九七三年に図書館が竣工した頃から玄関右手の植え込みの中には、花崗岩と思われる複数の大きな石と高札(図1)がありました。新図書館の完成予定は、二〇二六年になります。この石は、二〇二四年度中に致遠館前に移設される予定があるそうですが、この石の存在すら認識されないままに卒業して行かれる学生の皆さんのことを残念に思いました。そこで、奨励の話題に選んだ次第です。打ち棄てられ、四百年近く土中に埋れ忘れられていた、京都におけるキリスト教布教の本拠となった聖堂礎石のお話です。

先ほど、ペトロの手紙一第二章を朗読していただきました。ペトロが詩篇第一一八編二十二節から引用した箇所です。引用には、「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石をシオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」「家を建てる者の退けた石が隅の親石となった」とあります。聖書には、何度も「隅の親石」という言葉が出てきます。親石とは一般的に建築物の礎石を、石造建築ではとりわけ建築物の四隅を固定するための石を意味します。同時に、洋の東西を問わずに物事の礎(いしずえ)という比喩に使われます。聖書中の「親石」は、人々に斥けられたイエスが神に選ばれた尊い親石、教会の礎と解されています。蛇足になりますが、イエスは、教会の礎として指名した漁師のシモンにペトロという名を与えました。ペトロとは岩つまり礎石を意味する名前に他なりません。ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂は、ペトロを祀るカトリック教会の総本山です。

### 一 「都の南蛮寺」遺構の発掘と遺物(図1)

さて、旧図書館前の高札には、扇面図の写真とともに以下のように記されていました。

#### 「南蛮寺の礎石類

天正四年(一五七六)、京都にキリスト教会堂の南蛮寺が造営され献堂式が行われた。イエズス会のオレガンティノやフロイスらが織田信長の保護を得るなどして京都姥柳町の地に建てた。三階建の和洋折衷の教会で、後に豊臣秀吉の禁教令で破却された。昭和四八年(一九七三)に同志社大学文学部文化学科考古学研究室が想定範囲の一角を発掘調査した。

南蛮寺に関係する礎石類や当時のミサなどの儀式と思われる風景を線刻した硯が出土し、南蛮寺の存在が初めて考古学的に確認された。そして土地所有者タキカ株式会社のご好意を得て、本学に礎石類が学術材として寄贈された。同志社大学」

この発掘調査地である姥柳町(中京区蛸薬師通室町西入)の南蛮寺遺跡は、現在、和装の和光株式会社敷地となっています。蛸薬師通に面した敷地の一角には、京都市が昭和四十五年(一九七〇)三月に建てた「此付近南蛮寺跡」という石碑と以下を記した高札があります(図2)。

## 「此付近南蛮寺跡

織田信長の時代に、耶蘇会(イエズス会)によって建てられ、京都におけるキリスト教と南蛮文化の中心となった「南蛮寺」は、この北側、姥柳町の辺にあったといわれている。

戦国末期、京都でのキリスト教布教は、永禄二年(一五五九)から本格化し、永禄四年(一五六一)にこの付近に礼拝堂が設けられた。数々の迫害に遭いながらも、宣教師は布教に努め、信長の保護もあって信者は増加した。天正四年(一五六七)、数百人の信者の協力と所司代村井貞勝の援助により、古くなった礼拝堂が再建され、七月十六日に献堂式のミサが行われた。これが南蛮寺で、信者の間では珊太満利垂上人の寺とも呼ばれた。

しかし、天正十五年(一五八七)六月、九州征伐を終えた豊臣秀吉は宣教師追放令を発し、キリスト教の弾圧に転じた。南蛮寺もその時に破壊され、この地に復興されることはなかった。京都市

ふたつの高札に記された「都の南蛮寺」の存在は、イエズス会宣教師が記した記録類、伝承、そして扇面に描かれた一点の絵画によって伝えられてきました。しかし、現実の存在が明らかになったのは、一九七三年に、同志社大学文学部文化学科の森浩一先生(一九二八—二〇一三年)が陣頭指揮を取られ、南蛮寺跡地と想定される地域を発掘調査された時でした。先生が執筆された「京都市中京区姥柳町遺跡(南蛮寺跡)調査概報」(同志社大学文学部文化学科考古学研究室 一九七三年、同志社大学文学部考古学調査記録第二号)によりますと、当時の土地所有者であるタキカ株式会社が、地域に伝承されてきた南蛮寺に関心を寄せておられ、社屋建替に際し、一九七三年二月、京都市文化観光局文化財保護課を通じて同志社大学の考古学研究室に発掘調査を依頼されたそうです。同社敷地内五八九平方メートルの発掘調査は、同年三月三日からほぼ一ヶ月間に実施されました。南蛮寺関係と推定される礎石、根石、硯、陶器、銅器、銅銭など多数が発掘され、礎石を含めそれらの遺物が土地所有者のご厚意で同志社大学に学術資料として寄贈されました。

森先生の報告書には、安土桃山時代の地層に掘り進めるまでの大変な作業が述懐されています。木造文化の日本での発掘は、建物自体の形が出てくるわけではありませんから、建物自体が残る石造文化圏の発掘とは異なり途方もなく難しい仕事です。

京都市内各地には、過酷で長かった禁教の時代を経てなお、キリシタン灯笼やキリシタンの墓が現存し、居住地であったとされる「ダイウス(デウスの意味)町」「ダイウスの辻」という地名や聖堂跡とされる史跡が存在します。南蛮貿易に積極的であった織田信長がキリスト教を保護したことから、信仰は全国に広がり、京都に建てられた南蛮寺(教会)をはじめ、神学校、修道院が各地に建てられ、江戸時代初期には全国で二五〇前後の聖堂が存在したとされます。しかし、キリスト教の建築物自体の存在を初めて実証したのは、同志社大学の考古学研究室でした。発掘調査によって四百年近く土中に眠っていた南蛮寺遺構が確認されたのです。しかも、その礎石(図3)が土中に元の位置を保っていたという事に、私は深い感動を禁じ得ません。

遺物中には一点の硯があり、裏面に宣教師と蠟燭消しを携えた従者が刻線で描かれています。何の場面であるのか大変興味をそそられるところです(図4)。線描画の中、手前に大きな包丁のようなものと葉っぱ、植木鉢に入った植物などが認められることから、日本へのタバコ文化導入の痕跡を示唆すると

いう説もあります(ご興味のある方は、岡泰正著『[研究ノート]都の南蛮寺(被昇天の聖母教会)跡 出土の石製硯(すずり)裏面の線刻の解釈について』関西大学芸術学美術史研究学会 関西大学芸術学美術史研究学会eジャーナル三 二〇二二年をご参照ください)。陶器類には、美濃焼、瀬戸焼、唐津焼の茶碗が含まれています。ポルトガル人宣教師のイエズス会士ルイス・フロイス(Luís Fróis, 1532-1597)が詳細に綴った日本での見聞録中に、彼と同会の修道士が織田信長に南蛮寺建設の支援を乞いに美濃を訪れた際に、茶を振る舞われ信長から直に茶碗をもらった、という記述があります(フロイス著 柳谷武夫訳『日本史4 キリシタン伝来のころ』平凡社〈東洋文庫〉一九七〇年、第八章 二五一頁)。同志社大学の歴史資料館所蔵南蛮寺遺物の美濃焼もしくは瀬戸焼の茶碗の中には、その茶碗が混じっているかもしれません。

## 二 狩野宗秀 扇面画帖《都の南蛮寺》

南蛮寺の礎石は発掘されましたが、建物自体も図面も残っていません。では、京都における最初のキリスト教聖堂とは、一体どのような形をしていたのでしょうか。それを知る最初の手掛かりは、図書館前の高札にプリントされていた神戸市立博物館所蔵の扇面画《都の南蛮寺》(図5)で、桃山時代(十六世紀後期)に狩野永徳の弟、狩野宗秀(元秀 天文二〇[一五五〇]—慶長六年[一六〇一])が制作した、京名所扇面画帖六十一面のうちのひとつです。裏面には「五十、なんはんとう(南蛮堂)」と書かれています。来歴を辿ると南蛮寺にほど近い松原通の御殿医の家に由来し、画商他複数の所有者を経て日本屈指の南蛮美術愛好家として名を馳せた池永孟(明治二四[一九八一]—昭和三〇年[一九五五])氏の手に渡りました。池永氏は、南蛮美術を展示するために建てた私設美術館の建物と、その中身であった南蛮美術コレクションを総て一九五一年に神戸市に寄贈されました。現在の神戸市立博物館を特徴付けるのが池永コレクション由来の南蛮美術です。

さて、この小さな扇面画には、狭く不正形な敷地の中に天守閣のような形の三階建建築があり、玄関先、庭、二階の欄干から黒い法衣を纏ったイエズス会士たちと日本人信者らしき姿が認められます(図5-1)。敷地の周りには、京都町衆の本拠地である室町界隈の店(繊維業)が軒を並べ、街路には町人が行き交う様子が生き活きと描かれています。

西方キリスト教の聖堂建築は、カトリックであれプロテスタントであれ、規模の大小にかかわらず、また石造であっても木造であっても、基本的にラテン十字平面の平屋(ひらや)です。三階建とは不思議です(図5-2)。そこで、まず、戦国時代から桃山時代にかけて多く制作された「南蛮屏風」(南蛮人渡来図)中に描かれたキリスト教建築の様子を確認しておきましょう。

## 三 南蛮屏風に見る近世初期の風俗

南蛮美術と南蛮屏風の説明の前に「南蛮」「南蛮貿易」について触れておきましょう。「南蛮」とは、本来、中国で周囲の異民族を四夷(東夷、北狄、西夷、南蛮)と蔑称した言葉でした。しかし、日本では、「南蛮」の語義が変化します。戦国時代から安土桃山時代、十五世紀末から十七世紀にかけて、大航海時代に東南アジアを通して渡来した西洋文化を歓迎して受容したことから、「南蛮」は中国における東南アジアではなく、先進国であるポルトガルとスペインを意味するようになったのです。一四九四年六月、ス

ペイン帝国とポルトガル王国は、地球を縦半分（東西）に分割して世界制覇に乗り出すことになったトルデシリャス条約（Tratado de Tordesilhas, Tratado de Tordesillas）を結びました。セネガル（西アフリカ）沖のベルデ岬諸島の西約二千キロメートルの海上で子午線に沿った分割線の東側がポルトガル、西側がスペインに属するという決定でした。そのため、東回りに東南アジアを通して日本にやってきたのは、ポルトガルの貿易船とキリスト教布教のために同伴していたイエズス会士でした。

ポルトガルがマラッカを占拠した永正八年（一五一一）以降にポルトガルと日本との接触が始まり、元亀元年（一五七〇）には、長崎港がポルトガルに開港しています。貿易とセットになっていたキリスト教布教は、一五三四年に創設されたカトリック教会の修道会のひとつであるイエズス会が中心になりました。同会創設者のひとりである宣教師フランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier/Francisco de Jasso y Azpilicueta, 1506-1552）が薩摩半島の坊津に上陸したのが、天文十八年（一五四九）、日本におけるキリスト教布教の端緒となりました。

ポルトガルとの南蛮貿易は鉄砲（火縄銃）、羅紗、地球儀、機械時計、眼鏡、西洋楽器、油絵、銅版画、タバコなど未知の文物をもたらしました。そして、キリスト教宣教師たちは、ハンセン病の施療院をつくり、西洋医学、神学、哲学、天文学、暦学、数学、地理学、ラテン語、航海術などの知識や、西洋音楽、遠近法を用いた西洋絵画を教授しました。とりわけ、イエズス会の監督官である巡察師ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano/Valignani, 1539-1606）の功績は特筆に値します。彼は、活版印刷術と印刷機をもたらし、天草版、加津佐版、長崎版と呼ばれるローマ字のキリスト教文学・宗教書の翻訳をしたほか、日本語辞書の出版なども行っています。ただし、豊臣秀吉、徳川家康にしても外国との交易自体は歓迎するものの、キリスト教の広がりには危険視したために弾圧へと向かう結果を導きます。

次に「南蛮美術」の意味ですが、ポルトガルとの南蛮交易と宣教師の来日によって生じた日本の文化・風俗、ヨーロッパ文化をモチーフとする美術、そして一方で宣教師の求めに応じて日本で制作され、ヨーロッパに輸出した美術工芸品一般をさします。日本の南蛮文化を描いた絵画の中でも、南蛮船の来航と、陸側の宣教師やキリスト教の聖堂を重要なモチーフとする屏風を特に「南蛮人渡来図」あるいは「南蛮屏風」と呼びます。それらは、世界各地に約九十点現存しますが、おおむね図像が決まっています。金雲を配した装飾性の高い画面に、南蛮（ポルトガル）船が港に来航し、カピタン（提督）の上陸、乗組員たちによる荷揚げ、出迎えの宣教師や修道士、日本人信者などの風俗が描かれます。大半は、左から船が入港し、右手に日本の陸地が配されます。南蛮屏風は、狩野派をはじめ、長谷川派、雲谷派の絵師が手がけ、秀吉によるキリシタン追放令（天正十五年〔一五八七〕）、そして南蛮貿易終了後の江戸時代初期になっても制作されました。旧所蔵者には堺の豪商や日本海沿岸地域の回船問屋など商家が多いことから、異国から渡来した船による豊かな交易図は宝船のような「招福」の縁起物とみなされ人気がありました。しかし、日本美術の流れの中では、一時代限定に終わり、やや特殊な美術と位置付けられます。

ここに「南蛮屏風」の代表的な作例として狩野内膳（元亀元〔一五七〇〕—元和二年〔一六一六〕）による六曲一双の《南蛮人渡来図》屏風（一六〇〇年頃、神戸市立博物館所蔵）（図6—1）を挙げておきます。左隻では、外国から出港する船と見送る異国の人々、イエズス会士たち、象、聖堂などが、右隻には日本に入港する船、カピタン（提督）一行の上陸、乗組員による荷揚げ、出迎えの宣教師、修道士たち、

虎、豹の毛皮、孔雀の羽、陶器などを扱う唐物商の店先が認められます(図6—2)。日本の陸地では黒い法衣のイエズス会士と裸足で頭巾付きの質素な灰色の法衣、三つの結び目のある腰縄が特徴的なフランシスコ会修道士とが区別して描かれています。左隻、右隻ともに屋根に十字架を頂き、内部で宗教的儀式が行われている聖堂が認められます。いずれも平屋ですが、右隻の日本の聖堂は花頭窓がある入母屋造りの屋根をもつ仏教寺院、左隻の聖堂は中華風の極彩色というふうにより日本と異国の建築様式に区別をしています(図6—3、6—4)。

しかし、現存する「南蛮屏風」のいずれにも、狩野宗秀の扇面画のような天守閣あるいは楼閣風の三階建聖堂は認められません。

#### 四 日本におけるキリスト教聖堂

では、日本におけるキリスト教の聖堂建築の実際はどのようであったのでしょうか。歴史的に、多くの宗教が異教の地に進出した場合、最初は既存の施設を使い、次第にその宗教独自の形式を整えてゆきます。例えば、四世紀末にローマ帝国がキリスト教を国教化したあと、アテネのパルテノン神殿も、ローマのパンテオンもキリスト教の聖堂に転用されました。日本でも、先に挙げた狩野内膳の《南蛮人渡来図》のように既存の仏寺を転用し、屋根に十字架を載せた事例が多くあったようです。新築する場合でも、建材、工法は木造建築ですし、設計者が外国人であったとしても施工するのは日本の大工です。南蛮屏風を検証しますと、多くは格の高い入母屋造りもしくは寄せ棟造りの瓦屋根、畳敷き、襖・障子をそなえ、花頭窓、縁側、屋根上の十字架、柱や梁、欄間、破風、扉に付されたキリスト教のモチーフなどが特徴といえます。では、どこにキリスト教独自の工夫があるのでしょうか。

先に紹介した巡察師ヴァリニャーノは、日本における聖堂建設の方針として、習慣も建築物も和風に従うべきであるとしています。しかし、異教の宗教建築である日本の社寺建築とは明確に区別し、西方教会の定法を守るために横長ではなく、奥行きが長いラテン十字形の床平面の形に固執しています。そして、床平面を十字形にするために、聖堂の両側に座敷を設け、扉を開けて空間を一体化できるように、と指示しています(矢沢利彦・筒井砂訳『日本イエズス会士礼法指針』キリシタン文化研究会編 一九七〇年、第七章第八 一一三頁)。ヴァリニャーノの記述には、二階建、三階建の聖堂建築案はいっさい出てきません。

ヴァリニャーノが述べている和風の聖堂建築を彷彿とさせる、彦根城の堀端にある小さな礼拝堂を紹介しておきましょう(図7—1、7—2)。日本聖公会の牧師スミス(Percy Almerin Smith, 1876-1945)が設計した、昭和六年(一九三一)竣工の旧須美壽記念禮拜堂(現在は礼拝堂が移転し、彦根市の所管)です。和風仏堂風の外観ですが、鬼瓦、扉浮き彫り、欄間彫刻などに十字架や葡萄などキリスト教のモチーフがあり、内部は単身廊で内陣手前両側に引き戸で仕切られた畳敷の部屋があります。この扉を開けると床平面がラテン十字形になります。

一般に西洋風の聖堂建築とイメージされる建物が登場するには、幕末まで待たねばなりません。現存する最初期の西洋風のキリスト教聖堂は、大浦天主堂です。長崎の居留地内にパリ宣教団のフ□チシ□ヤン(Bernard-Thadée Petitjean, 1829-1884)神父が設計し、フランス・ゴシック建築の様式に倣っています。

## 五 「都の南蛮寺」フロイスの記録から

ここまで、南蛮寺遺構発掘記録、南蛮屏風の図像、ヴァリニャーノの聖堂建築方針を見てきましたが、扇面画帖《都の南蛮寺》における三階建建築の謎はいっこうに解けません。そこで、京都におけるキリスト教布教と聖堂建設の事情をフロイスの記録に探ってみましょう。

ザビエルは、日本上陸を果たした二年後の天文二十年（一五五一）に、「日本国王」から日本全土での宣教許可を得るために都に入りました。しかし、都は「天文法華の乱」と呼ばれる宗教紛争で荒れており、幕府は事実上崩壊し、朝廷も衰え、寺院は世俗化していました。ザビエルは落胆し、早々に都を離れますが、宣教師ガスパル・ヴィレラ（Gaspar Vilela, 1525-1572）が京都布教に挑みました。彼は、キリシタン大名・大友義鎮（宗麟 享禄三〔一五三〇〕—天正一五年〔一五八七〕）や室町幕府政所執事・伊勢貞孝（?—永禄五年〔一五六二〕）、三好長慶（大永二〔一五五二〕—永禄七年〔一五六四〕）、松永久秀（永正五〔一五〇八〕—天正五年〔一五七七〕）らの助力を得て、永禄三年（一五六〇）初めには室町幕府第十三代將軍足利義輝（天文三〔一五三六〕—永禄八年〔一五六五〕）に謁見し都での布教許可を取り付けました。そこでヴィレラは、四条坊門姥柳町に定住し、永禄四年（一五六一）、都に最初の礼拝堂を建設しました。フロイスによると「ここにばあでれ（ヴィレラ）は早速小さな礼拝堂と祭壇らしきものを設け、キリシタンたちはミサに与るためにここへ来るようになり、少数の名望ある人々がそこで聖い洗礼を受けた…」とあります（フロイス著 柳谷武夫訳 『日本史 2 キリシタン伝来のころ』 平凡社〈東洋文庫〉一九六五年、第二十九章 六八頁）。

しかし、京都での布教活動は、南蛮貿易で栄え有力なキリシタン大名が治める長崎や、京都の近隣高槻と異なり極めて困難を極めました。京都には朝廷、幕府、敵対しあう仏教界があり、戦乱に荒れていました。仏教界は敵愾心も露わにキリスト教を弾圧し、礼拝堂も荒廃していました。そんな中に、信長が入洛が状況を一変させました。仏教界の勢力を抑制するためには叡山の焼き討ちも躊躇わない信長は、フロイスやオレガンティノ（Gnecchi Organtino, 1533-1609）をはじめとするイエズス会宣教師を厚遇し、永禄十二年（一五六九）に布教許可を与えました。南蛮渡来品の献上も功を奏したでしょうが、巡察師ヴァリニャーノが立てた宣教師への指導方針の効果もあったと考えられます。彼は、日本人の礼儀正しさ、有能さ、理解力を勘案して支配的に接するのではなく、日本の風習に順応することを重視しました。それに従って京都での宣教師オレガンティノは和風の生活様式に適応し、僅かな期間で畿内の信者数を激増させたといえます。

永禄十一年（一五六八）、姥柳町の柱も折れ曲がり、廃れた礼拝堂の再建計画が始まりました。しかし、フロイスは、「天使の元后」（聖母マリア）に捧げる聖堂建設事業は、多くの人手によって礎石の搬入が始まったものの、資金難や戦争の勃発他で建設が滞ったことを記しています（フロイス著 『日本史 4』 平凡社〈東洋文庫〉一九七〇年、第七十八章 一〇九頁）。ここに図書館前にあった礎石に関する部分がありますので引用しておきます。

「…建物の柱の下に幾つかの大きな石を据えるために人手が必要であると聞くと、その石を残らず搬びこむために、彼は四、五十人の人手をそろえて城からやって来た。彼は仲間の中で皆の手本であり、最大の熱心と愛を示したので、当時その場に居合わせたばあでれ（宣教師）たちは、鶏卵大の、或いはそれに劣らない大きさの腫れ物を彼の両肩に見たが、それは石を担いだためにできたものであった…」

「彼」とは、畿内で最初期に洗礼を受けた結城山城守忠正の甥で、後に肥前国金山城（結城城）主となるジョルジ結城弥平次（天文十三年〔一五四四〕生）のことで、「彼」自ら重い石を運んだというのです。西ヨーロッパ十三世紀のゴシック期に、石造の大聖堂建設に際して、高貴な身分の人々がこぞって苦役に馳せ参じたことを思い起こせます。

ようやく、天正三年（一五七五）、信長の後ろ盾を得て、都の「被昇天の聖母教会」建設が始まりました。フロイスは、さまざまな困難に直面しながら献堂に至る一部始終を詳細に伝えています（フロイス『日本史 5 キリシタン伝来のころ』平凡社〈東洋文庫〉一九七八年、第一〇五章 一三七―一四四頁）。キリシタン大名の高山右近（天文二一〔一五五二〕―慶長二〇年〔一六一五〕）や結城弥平次らが建築資材、人手、資金を供出し、自ら工事の手伝いに来ました。ところが、いかにも敷地が狭いために、隣近所に土地を求めました。しかし、下京界隈の町衆住民たちはいくら高価な支払いを申し出ても土地を売ろうとせませんでした。他に代替地がありませんでしたから、やむなく極めて狭い敷地に三階建という特殊な形の聖堂を建てることになりました。工事が進行している時、町衆は今で言う高層建築に腹を立て、信長の部下で京都所司代の村井貞勝（?―天正十年〔一五八二〕）に取りやめるよう苦情を訴えました。しかし、村井が軽くあしらったために、町衆は仏教勢と連れ立ち、貢物を手に安土城の信長に直訴することを決めました。ところが、いち早くその情報を察知した宣教師たちは、手持ちの異国の品々を見繕って信長の元に先に到着し建築を懇願したのでした。信長が機嫌良く建築許可を与えたために、町衆たちは出鼻をくじかれました。

こうして、ついに天正四年（一五七六）八月十五日、ザビエルが日本に到着したのと同じ日、つまり聖母被昇天の日に献堂式のミサが執り行われました。

このミサの様子について、以下にフロイスを引用しておきましょう。

「…この教会の名称および守護者として選んだのは、御天上のサンタ・マリア（Nossa Senhora da Assunção）で、これはこの記念すべき日にばあでれメステレ・フランシスコが日本へ来て薩摩国に着き、福音の好い便りをこの地方にもたらしたことを記念するためであった。光栄に輝くこの日になると、教会はまだ完成していなかったが、…ばあでれオレガンティノがそこで最初のミサを上げた。…この祝典のためにみやこと近隣諸国のキリシタンが集まった。…これほど多くの駕籠と騎馬の者どがこれほどの人の群れをともなって我等の教会へ来るのを見、皆が復活祭の日のように晴れ着を着ているのを見てみよこの異教徒たちはびっくりした…」

## おわりに

多くの信者が集った聖堂が完成したのは二年後でした。信者の中で「珊太満利垂（サンタ・マリア）上人の寺とも呼び親しまれ、宣教師たちにとっては念願の都での布教活動の拠点となった誇らしい聖堂でした。しかし、天正十五年（一五八七）、完成してからわずか十年も経たずに秀吉のキリスト教弾圧で破壊され、二度と再建されることはありませんでした。南蛮寺の姿を伝える小さな扇面画の不成形な敷地に三階建という異例の聖堂建築の理由は、明かされました。狩野派の画家が京名所扇面画帖六十一面の画題に選んだのは、当時よほど印象に残る都のトピックであったからに違いありません。

旧図書館前に据えられていた南蛮寺の礎石は、まさに人々に斥けられ、棄てられた親石でした。同志

社大学の考古学研究室が四百年近くの眠りから呼び覚ましたものであり、都近隣の貴人自らが、肩に大きな瘤を作って運んだ礎石のひとつでした。同志社大学のキリスト教主義はプロテスタントであり、この石はカトリック教会のイエズス会が据えたものであるにせよ、困難の中に据えた熱い信仰の礎に他なりません。学内外の、ひとりでも多くの方にそのことを知っていただきたい、そして若い学生の皆さんが、社会の礎となって欲しいという願いをこめて私の奨励を結びます。

2023年 12 月 13 日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録

※図の表示はホームページでは省略します。